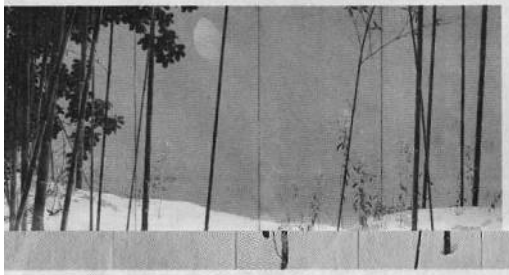
信濃毎日新聞1988年6月

美　私の一点

ブライアン・ウィリアムズ

【ブライアン・ウィリアムズ氏】
アメリカ国籍の画家。一九五〇年、南米ペルーのリマ市生まれ。十六歳のころから水彩画を始める。六八年、カリフォルニア大学に入学、美術を専攻する。七二年、世界一周スケッチ旅行の途中、来日し、日本の自然と人情に魅せられて、そのまま定住。四年前に琵琶湖を望む滋賀県大津市の山村の農家を買って改築し、透明水彩を中心に油彩、版画など創作活動を続けている。日本人の妻との間に三女がある。

木島桜谷「寒月」（部分）



木島桜谷（このしま・おうこく）　明治から昭和にかけての日本画家。一八七七（明治十）年、京都市内の茶道具商の二男として生まれる。明治二十六年、当時、京都画壇の大家だった今尾景年に師事、写生を基本とした花鳥、動物画を学ぶ。一方、儒医・山本渓愚について漢籍や本草学の知識を広める。後、岡倉天心の知遇を得て、日本画院の創立に参加、第一回展から毎回出品するなど、京都画壇の中心的な存在として活躍した。一九三八（昭和十三）年、六十一歳で死去。

線の流れが奏でる快いリズム

アメリカでの学生時代、美術書をあれこれ見ていて、本当に心を引かれたのは、ほとんどが日本の絵だった。ところがなんの、ほとんどのコレクションが蔵に入ったままで、めったに出してもらえない状態であることを知って、がっかりした。おまけに、展示されていても貧弱な照明で、作品本来の良さが十分見られない場合が多かった。でも、やはり美術館は美術館、見たい作品が集まっている。しょっちゅう、美術館に行くことにして、なんとか日本美術の感じ、あり方、いわゆる心を、少しずつつかまえようとしながらに至っている。

ある時、京都市美術館の常設展に、ぶらりと入ってみた。どんな作品が展示されていたか、今と思い出せないが、ただ一つ強く印象に残った作品があった。それが木島桜谷の「寒月」である。日本画、洋画に関係なく、やたらに味わえる作品。毎回、展覧会が開かれるたびに、必ず見に行くことにしている。

明治の大家には、ぼかし技法の名人だった上村松園、竹内栖鳳、川合玉堂等々の作品に見られる何とも言えないほのかしの美しさ。現代社会はイエス、ノーの極端な世界。絵画の域にまで、それが見られる。グラディエーション、つまりぼかしのセンスの無さ、寂しく感じられる。今の絵画の主流を占めている、いかにも厚塗りで、とにかく鑑賞者の目をクイーッと引っぱろうとする傾向に、私は飽きてきた。桜谷だから描いたエレガントでシンプリシティー（優雅で、控えめな、禁欲といった味）を、もっと参考にすると良いと思う。

木島桜谷は、絵かきとして出来ていた。豪華な飾りだけのために描かれたような、狩野派風な作品から、言いわけの世界を求める文人画的な作品まで、幅広く描きこなせた。人物、花鳥など、風景、有能な絵かきであった。

（武者など）、風景、花鳥などに優れた作品を数多く残している。動物に対しては特に、愛情と理解が深かった様子が、作品から十分に読み取れる。昨年、京都市美術館で開いた「没後五十年　木島桜谷展」で、数々の作品を見せてもらい、その感を深めている。

日本美術史にまで残るほどの傑作は、桜谷の場合、やはり「寒月」ではないかと思う。傑作と呼ばれる作品を、一点でも生み出せたことは素晴らしいことであり、絵かきの端くれの私にとって、誠にうらやましい限りである。

（この文は、ブライアン氏が英語と日本語で話したものを、妻の英美さんが、出来るだけ忠実に書き移した）

屏風の左端は落款（らっかん）を残し、無限に広がる空間。順に右に目を移して行くと、キツネの足跡と、ならたかに流れるような雪の丘のまま、めったに出してアクセントをつけるかのような、雪の重さに耐えられずに折れた竹。天に向く竹と木々。枯れ草のレース模様。後方の寒空に淡く光る半月。雪の稜線に沿って、目はさらに右に移動、屏風右下の雪水にいる。しょっちゅう、美術館に行くことにして、なんとか日本美術の感じ、あり方、いわゆる心を、少しずつつかまえようとしながらに至っている。

ある時、京都市美術館の常設展に、ぶらりと入ってみた。どんな作品が展示されていたか、今と思い出せないが、ただ一つ強く印象に残った作品があった。それが木島桜谷の「寒月」である。日本画、洋画に関係なく、やたらに味わえる作品。毎回、展覧会が開かれるたびに、必ず見に行くことにしている。

明治の大家には、ぼかし技法の名人だった上村松園、竹内栖鳳、川合玉堂等々の作品に見られる何とも言えないほのかしの美しさ。現代社会はイエス、ノーの極端な世界。絵画の域にまで、それが見られる。グラディエーション、つまりぼかしのセンスの無さ、寂しく感じられる。今の絵画の主流を占めている、いかにも厚塗りで、とにかく鑑賞者の目をクイーッと引っぱろうとする傾向に、私は飽きてきた。桜谷だから描いたエレガントでシンプリシティー（優雅で、控えめな、禁欲といった味）を、もっと参考にすると良いと思う。

木島桜谷は、絵かきとして出来ていた。豪華な飾りだけのために描かれたような、狩野派風な作品から、言いわけの世界を求める文人画的な作品まで、幅広く描きこなせた。人物、花鳥など、風景、有能な絵かきであった。

（武者など）、風景、花鳥などに優れた作品を数多く残している。動物に対しては特に、愛情と理解が深かった様子が、作品から十分に読み取れる。昨年、京都市美術館で開いた「没後五十年　木島桜谷展」で、数々の作品を見せてもらい、その感を深めている。

日本美術史にまで残るほどの傑作は、桜谷の場合、やはり「寒月」ではないかと思う。傑作と呼ばれる作品を、一点でも生み出せたことは素晴らしいことであり、絵かきの端くれの私にとって、誠にうらやましい限りである。

（この文は、ブライアン氏が英語と日本語で話したものを、妻の英美さんが、出来るだけ忠実に書き移した）

歩いて行くキツネが、片方の前足を上げたまま、立ち止まって振り向いている。何かの音を聞いたのだろうか、耳も目も鋭い。ほとんど、寒色ばかりで仕上げているこの一双の屏風に、キツネの姿にだけ暖色のかたまりがあり、自然に目がそこに行く。キツネを見ていると、後方の森（やぶ）の存在が目に迫って来る。桜谷は、ダイナミックな筆遣いによる迫力に頼らず、無駄のない繊細なタッチで、竹林の葉の一枚一枚、幹の一本一本を仕上げている。